

上野博士と八チ公

東京大学大学院農学生命科学研究科 農地環境工学研究室
塩沢 昌

上野英三郎先生（1871-1925年）は、我が国の農業工学および農業土木学の創始者である。38歳で著した「耕地整理講義」は、農業土木学の最初の体系的なテキストであり技術者に対して設計の指針と思想を示すハンドブックである。農学科出身の上野先生は、土木工学や機械工学を西欧の文献に学ぶとともに、西欧にはない水田についての用水計画や整備技術を実験と調査に基づいて創造的に生み出した。とくに、人力で農業が行われていた時代に、牛馬を効率的に使って労働生産性を高めることが課題になると見通し、そのための水田整備（長辺が100m程度の大区画、農道の整備と圃場への接続、用排水の分離など）を主張し、実際は1960年代からやっも行われた機械化のための水田圃場整備のモデルを、その60年も前にデザインしていた先見性には驚くべきものがある。農商務省での講習会と東大の講義で直接の教えを受けた技術者は3000人にのぼり、農地と灌漑排水施設など農業生産の基盤を作る技術者集団を育て、農業土木学というわが国に独自の技術学を工学部土木に頼ることなく農学の中に作り上げた。この技術学と技術者集団が、その後の灌漑排水、農地開発、1960年代以降の圃場整備事業などの農業土木事業を担い、我が国の農業の生産基盤を整備し、その生産性を高めたのである。

大の犬好きであった上野先生は、八チと名付けた秋田犬の子犬をとくに大事に育てかわいがり、大学への徒歩での出勤（当時農学部は駒場キャンパスにあった）と、試験場や現場への出張の際は渋谷駅に、いつも送り迎えさせていた。上野先生が大学で急死した後も10年間、渋谷駅の改札口に毎日通って死ぬまで大好きな飼い主の帰りを待ち続けた。渋谷区郷土博物館・文学館による当時の家族の遺族に対する最近の聞き取り調査によれば、頭のよい八チは、上野先生の生前から上野先生が何日も戻らなかった時は必ず渋谷駅から帰ることを理解していて、上野先生が帰宅日を家族にも伝えずに出張から戻ったところ、八チが渋谷駅の改札口で待っていて、上野先生は驚き喜んで八チを抱きしめじゃれ合った、ということがあったそうで、八チが渋谷駅で上野先生の帰りを待ち続けた必然性を示す話である。

私達、「八チ公と上野博士の像を東大につくる会」が東大につくろうとしている像は、この時のように、上野先生が駅で待っていた八チとスキンシップをしている、犬と人間との愛情関係を象徴する像である。